

連載 37 日本のオペレッタ映画『鴛鴦歌合戦』

『鴛鴦歌合戦』(1939年)はいくたびも観なおしたくなる、聴きなおしたくなる楽しい映画である。物語はまぎれもない時代劇の設定、意匠だが、流れる音楽のリズムは手練のジャズ! なのにミュージカル映画ではなくオペレッタ映画と名乗ったのは、アメリカリズムを敵視しつつあった時代の検閲をはばかったのだろうか。

翌年の「時代劇はよくなる 時代劇巨匠座談会」(『キネマ旬報』1940年7月1日号)に出席した監督マキノ正博は、戦時の国策に吞まれていく映画界について次のように発言していた。

マキノ 余り現在の時局の中に傾きすぎる。

村上(忠久・引用者注) その方が楽でせうが……

マキノ 楽ですからいけないでせう。

『キネマ旬報』1938年7月11日号の「弟満男へ」でマキノ正博は、満洲映画協会へ渡ろうとする弟牧野満男に「もう一度考へ直す気はないか?」とのメッセージを発してもいる。正博は、マキノ省三こと牧野省三の長男で、映画界芸能界に脈々と勢力を誇るマキノ一族の惣領でもあった。監督としては、早撮りで知られ、『鴛鴦歌合戦』も実質1週間ほどで撮影が終わったとか10日間で完成したとかの伝説があるが、それは「楽」をしたからではないのだろう。

片岡千恵蔵の粋な浪人、骨董狂いの若殿ディック・



『鴛鴦歌合戦』におけるディック・ミネと服部富子



『鴛鴦歌合戦』(1939年)

ミネ、そして傘張り浪人の身にもかかわらず骨董に目がない老父志村喬、その娘の市川春代、彼女と恋の鞘当てをくりひろげる裕福な商家のわがまま娘服部富子。片岡千恵蔵と志村喬、市川春代の父娘は長屋の隣に住む。千恵蔵を憎からず思いながら、意地を張る娘。いつもまがいものの骨董ばかりに手を出すディック・ミネと志村喬のドラマ。片岡千恵蔵の訳ありの育ちの秘密。

この和製「オペレッタ映画」、誰もがそれぞれに味のある歌い手だ。とくに志村喬の歌唱は、後年の『生きる』(黒澤明監督、1952年)の主人公を演じた志村の「ゴンドラの歌」を知る観客であればなおさら、その自在さと哀歎に唸らせられる。

マキノ監督はこれに先立って、片岡千恵蔵とディック・ミネで『弥次喜多道中記』(1938年)を撮っていて、これはめずらしく「早い、安い、面白い」だけではない評価を与えられている。水町青磁は「歌謡やギャグで笑はし^{なが}乍ら、首尾を一貫した人情噺の構成をすら持たせた点、マキノ正博の功であると共に、余り佳作を見せなかつた小国^{おぐに}の進歩とも見られた」「小物扱ひをしては損である」(『日本映画批評』『キネマ旬報』1939年1月1日号)と書いた。のちの巨匠、小国英雄がこんなふう言及されているのも興味深い。マキノ正博監督にとって『鴛鴦歌合戦』は、こんな言い方は形容矛盾のようだが、満を持しての早撮り映画だったのかもしれない。

宝塚歌劇団の高木史朗(『華麗なる千拍子』1960年

で知られる演出家)が絶賛したと伝えられる本作は、
2023年、柚香光・星風まどか主演、脚本・演出小柳
奈穂子で、宝塚で舞台化された。21世紀になっても
その物語と楽曲に古びない愉しさがあることに驚かさ
れた。